

＜NRI マンスリーレポートへの掲載記事＞

マンスリーレポートは NRI システム部門の情報発信レポートで何度か要請に応じて載せている。「視点」のコラムに載せるケースが多かったように思う。いずれもその時々で考えていたことを載せている。

「産業になり始めた情報サービス業」は「どこかのユーザーの下請けを行う受託」から「社会インフラを構築運営する産業」へと脱皮する機会の到来を感じていたころに書いたもの。1985 年ブラザ合意の年は電気通信事業法が施行され、国鉄が民営化された。セブンイレブンは 4000 店舗に達し、ファームバンキングが新たなインフラを築きつつあった。だがメインフレームの安定した事業に使った情報サービス業は本当には脱皮できなかったように今では感じている。

「いつの日か事業家は投資家になる」は資産運用本部時代、英国の年金を中心とするファンドが多くの海外資産をもって英国の衰退をカバーしているのに対して「全世界的に見れば資産家である日本人の多くが自分は貧乏人であると考えていた」当時の現状に違和感を覚えていたため書いた。

製造業はブラザ合意を乗り越え必死で国際化を果たしたが、本来やるべきだった金融業は国内に埋没し、今に至っている。通貨を超えた CMS とカストディーこそ金融業が本来行うべき仕事だったと思う。

「府中と立川」は中国の勢いに対し日本の既得権者の足の引っ張り合いを情けなく感じていたもの。150 年前横浜に 15000 トン級の船舶を横付けできる港を浚渫した先人に対し、小さな港を数多く作ってしまう当時の日本は情けなかった。金融、情報産業の分野で先取りできなかったことは悔やまれる。

「会社考」は読んでの通りだが、その後コーポレーションとエンタープライズを加えるとより深く分かるように思った記憶がある。王様のための組織、コーポレーション、価値観を持たず機能一式を持つエンタープライズ、カンパニー、ソシエテが似たような組織になることは面白いことと思う。いずれもう少しコメントするつもりでいる。